ケーススタディーの実施報告（詳細版）
（第４回）

第４回ワークショップ開催概要

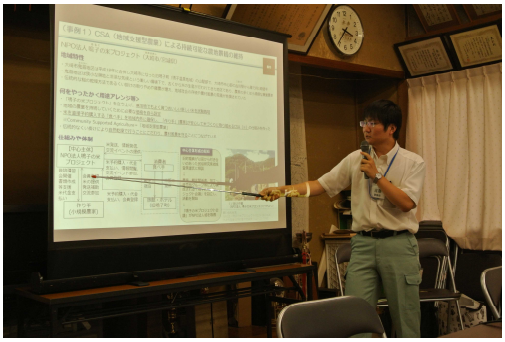
■会議名　第４回伊折地区の将来の地域づくり（土地利用）を考えるワークショップ
■日　時　2019 年 6 月 23 日（日）13 時 30 分～16 時 30 分
■場　所　伊折区太田公民館
■出席者　参加者：10 名（地区住民）
報道：2 名
コーディネーター：林准教授（金沢大学）
事務局
国土交通省：栗林課長補佐、吉澤専門調査官
佐藤専門調査官、尾﨑係長

中条地区住民自治協議会：大日方事務局長

参加状況

林先生からの挨拶

グループ討議


地域づくりの事例紹介

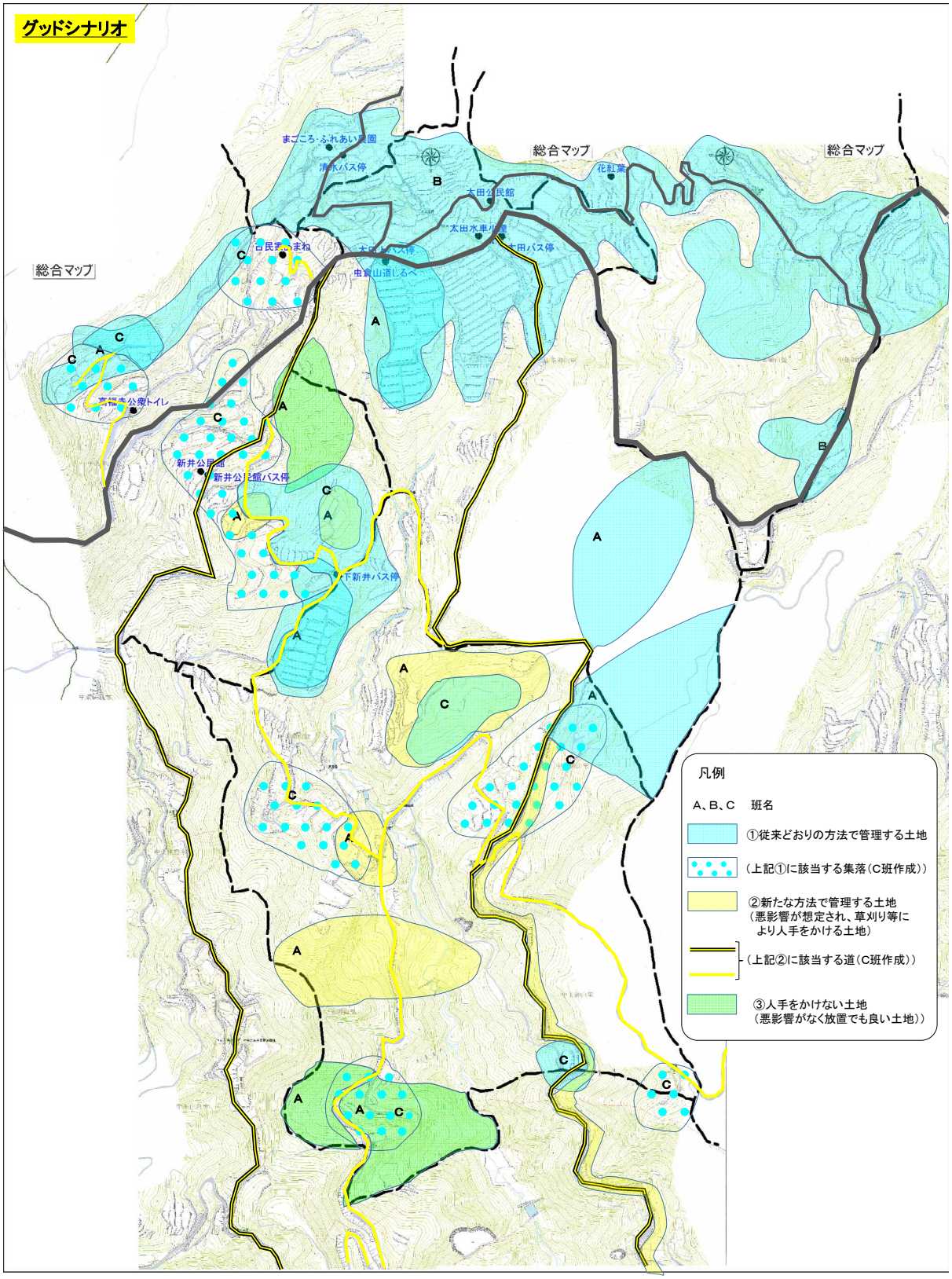
林先生からの冒頭の挨拶

〇第 1 回から第 3 回を通じて、地域の構想をグッドシナリオとバッドシナリオに分けて議論をできたことが非常に先進的。

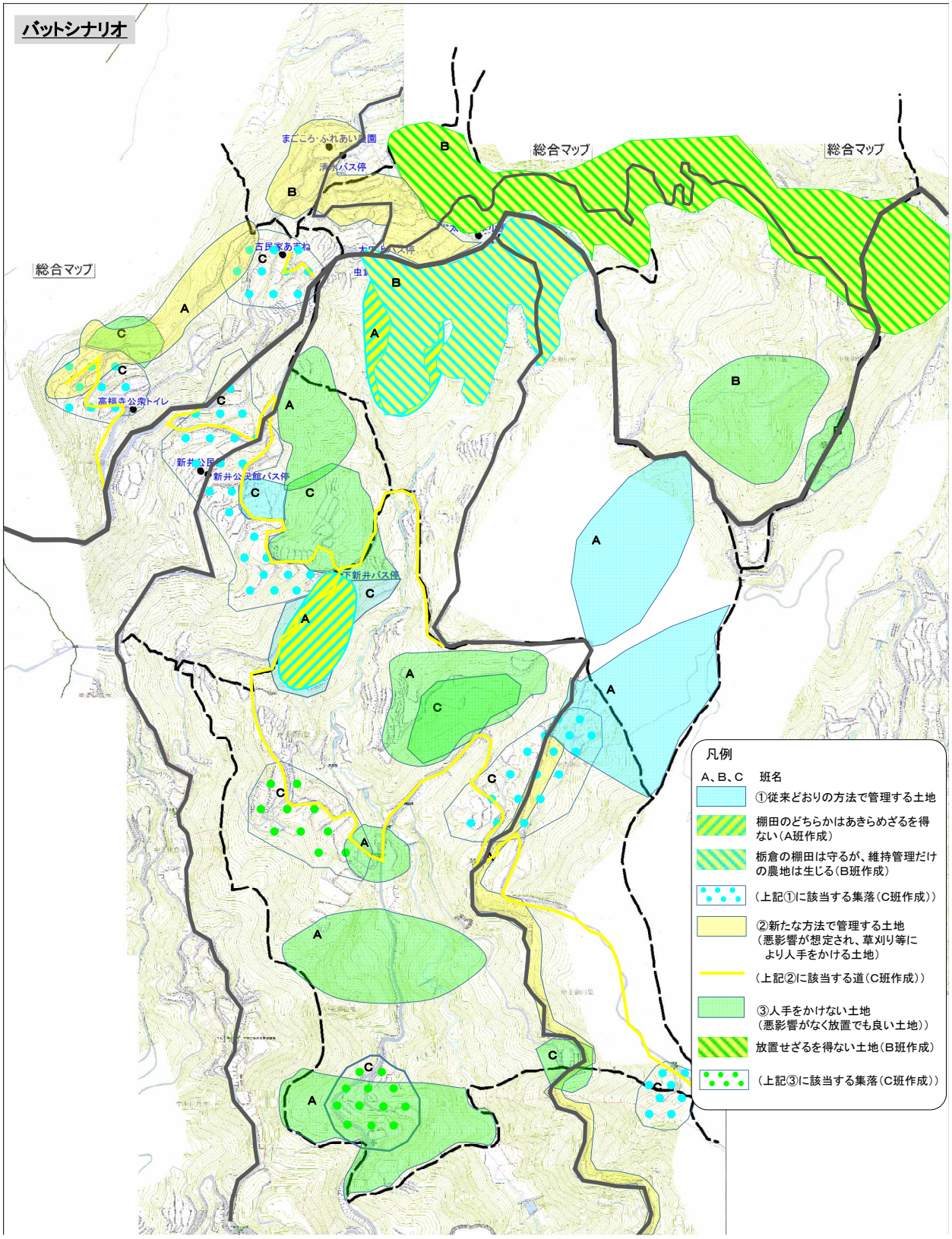
〇今回から、いよいよ実行に入る段階であり、非常に難しいところではあるけれども、しっかりと地域で話合い、答えを出していくことが重要。

グループ討議その１　“伊折地区全体の地域管理構想図を考える”

第 3 回で議論を行った地域の管理構想について、事務局で作成した伊折地区全体の地域管理構想図を元に改善点や修正点の確認を行った。また、地域全体の計画とするためには、どのように地域で計画を周知し、合意できるかについて議論を行った。



伊折地区全体地域管理構想図（第 3 回ワークショップ後事務局作成）ｸﾞｯﾄﾞｼﾅﾘｵ



伊折地区全体地域管理構想図（第３回ワークショップ後事務局作成）バッドシナリオ

＜Ａ班＞　ワークシート付せんメモ

	意見
地域管理構想図の修正点	・A班でこれまでヤギの適地として議論してきた場所は、今はだれも利用・管理していないので、グッドシナリオで、青色ではなく黄色ではないか。 ・色の塗っていない場所は、現状誰も使っていない場所である。 ・黄色で塗っている銀杏畑だが、昔に皆で銀杏を植えて共同管理していた。今も秋になると銀杏の実がなり、少し管理すれば奥まで銀杏畑として再生が可能。
地域内での計画の合意形成	・地域の中で、いま議論をしている計画について照会をした際に反対をする人はいないと思う。計画について合意形成をするのは難しくないが、その先の実行にあたっての協力を得られるかは別問題。 ・伊折地区の中に、いま地域で共同で何かをやるという土台がない。道路の草刈程度はやっているが、それ以上のことをやる余力もない状況。
その他	・新たな移住者等の大幅な増加が見込めない中、地域の中で一人でも多くやる気になってもらうことが重要だが現状厳しい。 ・やる気になってもらうためには、土地利用が赤字の状態ではどうしようもない。 ・信州新町では桑畑をカラー（花）にしたり、梅を栽培したりしてうまくやっている事例がある。黒字だと聞いている。しかも、伊折地区と立地が似ているかなり奥の方の地区でうまくいっている。

＜Ｂ班＞　ワークシート付せんメモ

	意見
地域管理構想図の修正点	・ 管理構想図については主な修正なし （その他意見） ・ 竹林が生い茂って道を覆うようになっている箇所がいくつかある。ほかにも対策をしないといけない場所があるかもしれない。 ・ （ログハウスの箇所）展望が良い場所だが昔の地滑り跡
地域内での計画の合意形成	・ 特になし
その他	・ 人をどう呼び込むか。農業体験や貸農園などの取り組みはかつて行ってきたが、今は先細ってしまった。自らの農作業の余剰がないと、外部からの農業体験への対応ができない。 ・ 今の人たちで土地をどう守っているか。草刈りの人手が足りなくなったり、蕎麦などの栽培に手間のかからない作物でも、製粉や加工を依頼すると労力に見合った実入りにならない。 【地区の地域おこしの現状について】 ・ 農業体験、稲刈り体験なども昔からやってきたが、なぜそれが続かないのかが詳細な理由は自分でも分からない。 ・ 我々のあとの代の若い人たちが参加しなくなった。自由になってしまって、消防団など、そういう役が嫌だといって村を離れてしまった。下に簡単に家が建ってしまう、そうすると来なくなる。 ・ 若い人が来る要望はあるが、売る家がない。 ・ イノシシの被害が大きく、平地なら柵を立てて対策できるが、斜面だとどうしようもなく、営農をやめてしまった ・ 百姓仕事だけでは今は生計がたたない。お楽しみの農業ならいいのかもしれないが、それすら獣害でできない。 ・ 有機栽培などを活用してある程度規模の大きな農業で生計を立てている人もいる。その気になればできなくはないが、一年中作業をしている。 ・ ただのもの、山菜などではいいだろうが、農業の仕事は時給換算すると勤め人よりも低い ・ 昔、ここより上の山で貸農園をやっていて、地区外から人が来ていたが、始めて７－８年ぐらいで我々の貸農園に行く道の整備など、農園周辺の管理作業が追い付かず、断るようになった。 →身近なこの集落の中で再開してはどうか。 ・ 家庭農園を始めようにも、貸農地の世話（畔の草刈、水管理）を新たに始めることが難しい。 ・ 世代交代がうまくできるような制度を設計しないといけない ・ かつて、「田んぼの会」があって時々都会の人が来て田植えと収穫を体験している（今、数軒でやっている） ・ 普段の農作業に余剰がないと、そういうことにかける余裕がない（稲作は田植え、稲刈り、草刈り、水管理からなるので、畑作と比べ意外と労力がかからない） ・ ここにはいい水と空気、景色がある。 ・ 村を離れた子供は村に残った親の手伝いで来ることはあるが、親がいなくなれば来なくなるだろう。

グループ討議その２　“地域管理構想図の実現に向けた実施主体について考える”

全国の先進事例などを参考に、伊折地区で地域管理構想図の実現に向けて、実行に移していくための中心的な主体のあり方について議論。

＜Ａ班＞　ワークシート付せんメモ

	意見
実施主体について	・興福寺、沢尻の地区の人間だけで、清水、太田、小手屋の地区のことも含めてまとめてやるのは難しい。伊折地区全体で様々なことを考えるのであれば、両方の地区のメンバーで構成された組織が必要ではないか。
その他	・地域の皆にやる気になってもらうためには、稼げる仕組みが必要。そういう意味では、鳴子の米プロジェクトなどは参考になるかもしれない。 ・ただし、少し稼げるようになったとしても、子育て世代が子供を養いながら農業で生計を立てるのは不可能。 ・担い手はどうしても年金をもらって、農業で小遣いを稼ぐモデルとならざるを得ない。定年退職後の世代など。 ・伊折でも子供を育てながら農業だけでやっている世帯もあったが、特殊事例。リタイアした両親が健在で年金も受給しつつ、畑も家族全員で手伝いながら行った事例であり、そういうパターンでないと、農業だけではとても子育てしながら生活ができない。

＜Ｂ班＞　ワークシート付せんメモ

	意見
実施主体について	・地域おこし協力隊は事業付で募集を行っている（狩猟やジビエ事業のための）。罠を設置していることくらいしか知らない。 ・住自協（住民自治協議会）の地域振興部が年間の事業計画をたてたり、協力隊とのやりとりを行っている。ただ、地域の課題を整理することを住自協に期待するには地域振興部の事務方のマンパワーでは難しい。住自協にも福祉ワーカーがいるケースであれば地域に寄り添うことができるのだが。 ・若い人と話し合う場がなく、何を考えているか分からない。田んぼや登山道の草刈りなどに、下場で働いている息子世代が手伝いに来るが、慰労会などまでは参加してくれない。世代間交流がない。
その他	・虫倉共和国（伊折地区の中でもＢ班のあった旧１６区で実施）では、全戸が参加した。あの頃は平成元年で人も多く元気があった。初代大統領になった人は暇でよく精力のある人、アイデアもあった。その一環として人の集まる手段としてスナックバスとして、村にスナックを作りバスでよそから人を持ってきた。当時も今から盛り上げていかないと過疎化する、という考えから始まった。公園やキャンプ場などもつくり、７－８年続いた。楽しかったけど、忙しかった（スナックは全て集落の女性が手料理をふるまったがそれが大変な作業になったため、次第に女性の協力が得られなくなり、続けられなくなった。）。 ・仮に今、管理構想図に沿った取組を地域内に呼びかけたとしても、虫倉共和国が続かなかった事例もあるため、人が付いてくるか疑問。 ・地域の土地を管理する取組について、良い方法が思いつかなくて困っている。貸し農園など、思いつくことは全て実施して継続しなかった。なにか良い方法がないものか。

全体を通じてコーディネーターの林先生からのご講評

〇これまでの議論と比べると、実行段階に入ったというか、いざやるというフェーズに入って重みの様なものを話し合いの中で感じた。

〇主体の話や、実際に何をやっていくかを決めることは容易ではなく、話合いの場を持ちながら少しずつ進展させていくことが重要。

〇この地域は貸農園などをすでに実施しており、地域おこしの上級者であると感じた。失敗などが共有されているからこそ、うまくいくのではないかという期待を感じた。

【その他：林先生、事務局より】

〇村が目指したい将来の方向性を描いて、それを行うのに必要な外部人材を募集して企画書を集め、村の方向性に一致した人と協力する、というやりかたはあるだろう。

〇失敗の事例集を作成したい。こう取り組んでみて難しかった、うまくいかなかった、というのはたくさんあるはずだろうから整理してみてはどうか。成功事例だと、その方法以外がない。失敗事例の整理は、それにより地雷原は何かを探して、そこを外して地域の自由な発想を活かした方法につながる